

探訪

はえばる
南風原

琉球絣の里

織工房「由」(ゆい)は、沖縄県で唯一海に面していない町にあります。

伝統工芸師である大城ヨシ子さん、長女伊敷美千代さん、末娘の富山(とうやま)アヤ乃さんの三人の親子で工房を営んでいます。

写真の中央が、次女のアヤ乃さん。彼女が羽織っているのは、アヤ乃さんの嫁き先が決まったとき「披露宴の衣装は三人の力を合わせて織りたい、との願いから、約一年の歳月をかけて織り上げた衣裳です」と、母親のヨシ子さんは話してくださいました。

普通は、「1反の着物は織り初めから、織り終わるまで、ひとりの織り手が仕上げないと、織斑が出て美しい着物は出来ません。」しかし、「不思議なこと、思い通りの衣装が出来てきました。

これも、親子だから出来る「絣」と、沖縄の助け合いの精神「ゆいまーる」の精神があったからこそ、うまく出来たのかもしれない。と、三人が顔を見合せて笑っていたのが印象的でした。



左から、伊敷美千代さん、富山(とうやま)アヤ乃さん、大城ヨシ子さん

織工房「^{ゆい}由」は、伝統工芸師の大城ヨシ子さん、長女の伊敷美千代さん、次女の富山アヤ乃さん、三人の親子が沖縄では不思議なことに唯一海に面していない町、絣の里・^{はえばるちょう}南風原町にある絣織物工房でがんばっています。

織工房「由」を訪問しました。

ゆい

19歳で、南風原へ嫁いできました。

大城ヨシ子さんが、この仕事をするきっかけになったのは、19歳のとき、南風原にお嫁に来たことがきっかけになったとのこと。

そのとき、嫁ぎ先のおばあちゃんから教えられたのが織り始めのきつかけだそうです。

それは、「私が、5ヶ月の美千代（長女の伊敷美千代）がお腹の中にいるときで、毎日1反の無地の着物を織っていました。」と、その時のことを今でも懐かしく思い出されるそうです。



織(おり)工房「由」の入り口に
あった表札です。右が
大城ヨシ子さん。



大城ヨシ子さん
(織工房「由」の庭先で)



織工房「由」の大城ヨシ子さん

毎日昼の3時に近くのお爺さんが反物を...

私が嫁いだ頃、「毎日近くのお爺さんが、市に出すため昼の3時になったら織りあがった反物を取りに来るから、ご飯を食べたらすぐに機に向かっています。」そして「子供は横でお婆ちゃんが抱いて子守をしてくれていました。」

その時は、「無地ばかり織っていましたが、それでは駄目で、お婆ちゃんから緋を教えられ、そして花織も習いました。2人目のアヤ乃ができたときに、経糸巻きも教えられました。」

やがて、「4〜5年程してから経糸巻きをやって、その後、緋織を、そのあと、大城織物工場に入り、20年間、整経から糸染まで琉球緋の殆どのことをやりました。」そして、「緋組合の講師を10年務め、平成15年に、今の工房『由』(ゆい)を始めました。」

工房の名前の「由」^{ゆい}は本名です。私は沖縄県で一番北にある離島・伊平屋島(いへやじま)から嫁いできました。

「工房の名前の由は、親がつけてくれた名前で、(よしこ)と読みます。ところが、南風原に嫁いできたら、カタカナの(ヨシ)と漢字の(子)に変わってしまったので、どうしようかな、と思いました。私は沖縄県で一番北の端にある離島の伊平屋島(いへやじま)※の生まれだったので、当時は今のよう交通が便利ではなく、帰るのが大変でしたので、そのままにしておきました。

でも後になって、実家に帰って役所で調べてもらったから、やっぱり漢字の(由)で「よしこ」と読むのでした。役場の戸籍にはしっかりと載っていました。(笑)

そのときは、親がつけてくれた名前をおろそかにするのは、親不孝とは思いましたが、由は、結(ゆい)にも繋がりが、また、おのおのものをつくるというイメージがあり、三人おのおのが、ものを作るという意味もあり、工房の名前にしました」。

「今は、親子三人で頑張は良かったと思いますし、少しでも親孝行ができるのではないかと感謝していますと笑って話されていました」。

私が子供頃、島のあちこちで

かいこ
蚕を飼っていました。



※伊平屋島(いへやじま)

沖縄県最北端の友人の離島。島の歴史は古く、琉球王朝の第一尚王朝・尚巴志の祖先・屋蔵大主(やぐらうふぬし)生誕の地として知られ、屋蔵墓や天の岩戸などの史跡や伝説が残っています。伊平屋島は第一尚王朝の祖先を祭る神の島です。

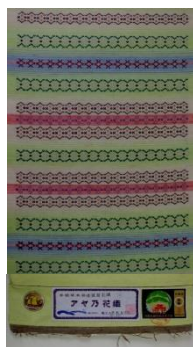
大城ヨシ子さんが子供の頃は島も養蚕も盛んであった記憶があるそうです。



図案帳を見ながら、デザインを考える
大城ヨシ子さん



御絵図帳を基に描かれた緋の図案帳



アヤ乃花織(帯)



御絵図帳



(沖縄県立博物館 所蔵)

※「御絵図帳」は、琉球王国時代、上様(国王)、聞得大君、摂政、諸士などが貢納布(御用布)を織らせるために作成されたデザイン画のことです。依頼主が注文のために使う「カタログ」と、久米島、宮古島、八重山に送られた「仕様書」の役割があります。絵図が作成された目的や使われ方などは、ある程度わかっていますが、いつ頃から絵図があったのか、誰が描いたのか、このデザインは誰の発案なのか、詳細は分かっていません。

織工房「由」^{ゆい}は三人の親子でがんばっています。

長女の美千代さんは、小さい頃からお小遣いをもらいながら仕事を手伝っていたようですが、母の仕事をしているのを見て、大変なことが解っていたので、「絶対にこの仕事だけはしないぞ」と決めていたようですが、子育てしながら自分のペースで出来る仕事だったので、するようになったそうです。

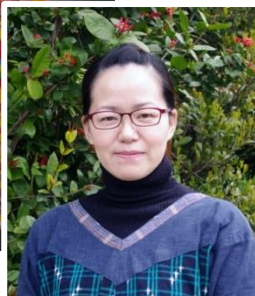
仕事を始めるきっかけは、「母が組合で講師をしている時に平成9年に組合の研修生として入りました。そして、母と同じように講師も努めました。今は、すべて自分が一人で商品作りをするようにがんばっています。」



美千代さんは嫁ぎ先の糸満から通っています



琉装でお嫁にいきました



アヤ乃さん

次女のアヤ乃さんは、伝統工芸士のお母さんの仕事を間近で見て育ちながらも「この仕事をするとは思わなかった」そうですが、県工芸技術支援センターでの研修をきっかけに染織の世界へはいられたそうです。

これも、「家族の全員が織物に携わっていたから、自然とこの世界に入ったのか」と言われています。今は、花織を中心に作っているそうです。糸染めは、染料は植物染料の方が落ち着いた色が出たため、月桃、藍、藍、福木も使っているようですが、椎の木は、母の実家の伊兵屋島から持ってきているそうです。

私はいま、工房の近くの嫁ぎ先の実家お婆さんと一緒に暮らしています。

お婆さんはまだ、綜統の仕事をしています。今までは、仕事のほとんどが分業制でやってきました。しかし今は、時代の変化と共に、緋に関わる人が少なくなつて、分業制が難しくなつてきています。

たとえば、難しい作業工程で、経糸をつくる作業があります。

経糸を括る人と、それを染める人が別々になっているため、括る人の癖を知っていないで、染めると、糸が伸びたりして緋が合わない事もあります。

昔なら、夫々の癖をよく知っていたため、うまくいった事も、今はここで生まれた人の多くがこの仕事につく事が無く、スムーズに仕事が捗らなくなっているそうです。

そんなこともあり、私たちの工房では、これからはひとりひとりがすべての行程をこなさなければならぬと思っています。

織工房はおかげさまで、三人とも全ての行程を経験していますので、括りも、染めも、織もすべてを工房でやろうと思っています。



親子3人で頑張ります

訪問

織の財団

山田標件